

いじめの意識調査による教育心理学的取り組み

I. 中学生の場合

A Survey Conducted on Bullying from the Perspective of Educational Psychology: A Study of Junior High School Students

(2004年3月31日受理)

平 松 芳 樹
Yoshiki Hiramatsu

Key words : いじめ, 意識調査, 教育心理学的取り組み, いじめ予防

要 約

いじめの問題は、その被害を受けた人にとって深刻な問題であると同時に、加害者を生み出す現代の家庭、学校、社会の問題でもある。今回、中学生を対象に、いじめられた経験、いじめた経験、いじめを見た経験、およびいじめについての考え方で構成した質問紙を作成して、いじめの意識調査を実施した。その結果をまとめて報告することが第1の目的である。さらに、学校現場へ結果をフィードバックして全教員で検討する試みを実施した。また、幼児教育科の学生教育の教材としても活用した。こうした教育心理学的取り組みが、いじめを予防する対策の一環として機能する可能性を見いだすことも検討した。

1. は じ め に

平成6年に愛知県の中学生在がいじめを苦にして自殺したことは、その手記が遺言の形で公表されて、社会的問題として大きく取り上げられた。このように、いじめの問題は、その被害を受けた人の心身に傷を負わせ、死に至ることもある深刻な問題である。心の傷のケアに臨床心理学的支援が期待され、この対策の一環として、スクールカウンセラー制度も創設されるなど、教育界の改革に関心が集まっている。しかし、いじめ問題の背景には、加害者を生み出す現代の家庭・学校・社会の問題が存在する。臨床心理学的観点の他、教育心理学的観点からもいじめ防止の対策が検討されている。

真仁田(1998)は、平成8年の文部省報告「いじめの問題に関する総合的な取り組みについて」をうけて、いじめにかかわる教育的課題について、予防と防止、介入と分離、支援と指導の三側面から対応することが必要で

あると述べている。

高野(1986)によれば、いじめ問題が社会的関心を呼ぶ以前の「校内暴力」の全盛期に、教育心理学者や臨床心理学者は、すでにいじめの問題が次の社会問題になることを予測していたという。校内暴力もいじめも同じ根を持つものであるが、学校や教師に対する暴力現象である校内暴力の方は、警察力などで制圧することはむしろ簡単であるから、次に問題化するのはいじめになることが分かっていたというのである。さらに、いじめの定義がかなりあいまいなことも、適切な対応ができないことに通じているとしている。そこで、いじめを「圧倒的に強い立場にある者(あるいは集団)が、反撃の余地を持たない弱い立場にある者(あるいは集団)に対して、ことばや態度や比較的軽度の身体的攻撃によって、主に心理的な苦痛を与える行為」と定義した。この定義では、意地悪な行為や、法に触れる行為を除いたものとして、教育心理学的にとらえる必要性を提案している。

本報告では、中学生にいじめの実態調査を実施したのでその内容について報告する。また、実施した学校現場へその結果をフィードバックして、研修の機会を持った。さらに、短期大学の学生がアンケート作成と結果の処理などを通して、いじめ問題に関わった。このような教育心理学的取り組みが、いじめ予防対策として機能する可能性を見いだすことを目的としている。

2. 方 法

(1) 質問紙による意識調査

中学生を対象にした、いじめに関する意識調査用紙「いじめに関するアンケート」を作成した。調査項目の選定にあたっては、高野(1986)、詫摩(1995)などの文献を参考にした。アンケートの作成と集計には、短期大学幼児教育科2年生の中で、いじめ問題の調査に関心の高い学生の協力があつた。

(2) 実施時期

2001年11月

(3) 調査の回答協力者

岡山県内のM中学校の1年生から3年生まで全校生徒286人

(4) 統計的分析

SPSS 10.0J for Windows により行なった。

3. 結 果

アンケートの集計結果は以下の通りである。問1から問24までである。問1で性別を尋ねた。問2は、回答者がいじめの被害者になった経験の有無を問い、有りの場合は問3から9までの枝問でその体験について回答を求めた。問10で自分が加害者となったことの有無を問い、有りの場合は問11から16までの枝問でその体験について回答を求めた。問17でいじめの現場を目撃した経験の有無を問い、有りの場合は問18から20までの枝問で自分の取った行動や感じ方について回答を求めた。問21から最後の問24までは、回答者全員のいじめ問題の認識について質問した。特に最後の質問では、いじめがなくなると言うかどうかを回答した上で、それぞれの理由を自由記述で求めた。数字はすべて人数で、複数回答は加算して集計した。

【いじめに関するアンケートの集計結果】

問1 人数と性別

[286(男137, 女149)]

問2 いじめられたことは(全員対象)

[ある63, ない223]

「ある」と答えた人は問3～問9に回答

問3 それはいつか

[小学校35, 中学校21, 両方6, 無回答1]

問4 いじめは個人からか複数からか

[個人18, 複数43, 無回答2]

問5 誰かに相談したか(複数回答可)

[親17, 友達11, 先生18, 誰にもしない25, その他2, 無回答1]

問6 どんないじめをされたか(複数回答可)

[無視26, 言葉でのいやがらせ40, 暴力8, 持ち物隠し5, ものを買わされる1, お金を貸してと言われて取られる1, したくないことをさせられる12, その他5, 無回答3]

問7 自殺を考えたことは

[ある22, ない41]

問8 いじめのきっかけ(複数回答可)

[服装0, 持ち物3, 顔やスタイル8, 部活3, 家のこと1, 男(女)だから0, 不明40, その他12, 無回答1]

問9 いじめは続いているか

[はい5, ない56, 無回答2]

問10 いじめたことはあるか(全員対象)

[ある93, ない193]

「ある」と答えた人は問11～16に回答

問11 何人でいじめたか

[1人9, 複数84]

問12 なぜいじめたか(複数回答可)

[むかついた40, きらい27, 何となく19, その他17]

問13 どんないじめをしたか(複数回答可)

[無視54, 言葉でのいやがらせ41, 暴力14, 持ち物を隠す6, ものを買わせる4, お金を貸してと言って取る3, したくないことをさせる9, その他1]

問14 いじめをしている時の気持ちは(複数回答可)

[スカッとした11, 楽しい9, おもしろい7, かわいそう12, やめたい10, 何も感じない47, その他5]

問15 いじめられている人の気持ちを考えたことは

[ある32, 少しある42, ない17, 無回答2]

問16 今もいじめをすることは

[ある0, 時にある17, ない75, 無回答1]

問17 いじめを見たことは(全員対象)

[ある170, ない116]

「ある」と答えた人は問18～20に回答

問18 いじめを見て何かしたか(複数回答可)

[気の毒と思ったが何もしなかった110, 止めた10, 抗議した4, その場から離れた25, 加わった7, 誰かに知らせた20, その他4, 無回答2]

問19 どんないじめを見たか(複数回答可)

[無視60, 言葉でのいやがらせ87, 暴力50, 持ち物隠し17, ものを買わせる4, お金貸してと言って返さない7, したくないことをさせられる18, その他4]

問20 そのいじめを見て感じたこと(複数回答可)

[かわいそう90, 止めさせたい31, おもしろい7, 巻き込まれるのはいや32, しかたない32, その他0, 無回答2]

問21 いじめは今もあるか(全員対象)

[ある168, ない111, 無回答7]

問22 いじめをどう思うか(全員対象, 複数回答可)

[悪いこと201, いつでもどこでもあること61, 関係ない15, その他6, 無回答10]

問23 いじめはどちらに問題があるか(全員対象)

[いじめる人73, いじめられる人24, 両方180, 無回答9]

問24 いじめはなくなると思うか(全員対象)

[なくなると思う75, なくなると思わない193, 無回答18]

[なくなると思う理由(自由記述の主なもの)]

みんなが仲良くすれば良いと思う(多数)。みんながなくなそうと思えばなくなる(多数)。何となく(多数)。みんながいじめられる人の気持ちになればなくなる。止めればなくなる。最近いじめについていろいろな人が対策を考えているから。嫌いな人がいてもがまんすればよい。みんなで話し合う。人をいじめる権利はないから。いじめる人・いじめられる人どちらも傷つくと思うから。みんなが協力すればいつかなくなる。

[なくなると思わない理由(自由記述の主なもの)]

いじめは悪いことじゃないと思っている人が多い。悪いことをしていると分かっていない。みんな自分がいじめられないためにいじめをする。身分の差がある限りどこでも。人間が集団で生活していく中で必然的に起こりうるものだと思う。いじめは簡単に解決できることではない。気の弱い人がある限りいじめは終わらない。口で言って止める人なんか最近いない。どんなに抗議しても言うことをきかない人はきかない。今の人間は人の気持ちを考えられない人が多い。今の子どもは頭が悪い。自分のストレスが発散できる。今のままの世の中だと一生なくなる。嫌いな人は嫌いだから。むかつくことはがまんできない。いじめる人たちの意識の問題。なくなるならとっくになくなっている。みんな仲良くすることは不可能。学校とか人とつき合っていく中でなくならない。みんな先生とかにばれないようにしている。いじめられてる人も他の人に言えない。いじめようという気持ちを持っている人が多い。人は自分より弱い者がいないと安心できない。

4. 考 察

(1) アンケート調査にみられる、いじめに対する中学生の意識は、次のようにまとめられる。

① いじめられた経験の有無

今回調査した中学生で、いじめられた経験があると答えたのは63人で、調査者総数の22%にあたる。このうち男子は41%, 女子は59%であり、性差の有意差はなかった。また、小学生の頃の体験者は41人で65%にあたる。中学生になっての体験者は27人で43%である(両方と答えた6人はそれぞれに含めた)。高野らの小学生の場合では、いじめられた経験を持つ子どもの割合は、小学校3年生男子78.1%, 女子83.3%, 小学校4年生男子83.9%, 女子80.0%, 小学校5年生男子71.1%, 女子81.3%であり、かなり高い比率で存在する。この調査と今回の中学生の調査とは、方法も違うため、このまま比較はできないが、小学生の頃からいじめられた経験を持つ子どもが多いことに気づく。

いじめられたのは、個人から(30%)よりも複数による(70%)ものが多い。誰にも相談しなかったと答えた者が25人(40%)もいることが注目される。いじめの種

類では、言葉でのいやがらせ（40人）と無視（26人）が多かったが、きっかけは不明（40人）が最も多かった。自殺を考えたことがある者が22人（35%）いることは、いじめの深刻さを表している。

② いじめた経験の有無

自分がいじめたことがある者は、93人（33%）いて、いじめが身近なこととして存在する状況を示している。いじめの多くは単独でなく複数（90%）で、無視と言葉でのいやがらせという心理的手段がほとんどであるが、暴力も14件ある。いじめられる人の気持を考えたことはある（少しあるを含め）が80%もあるにもかかわらず、いじめをして、かわいそう、やめたいというのは22人にすぎない。スカッとする、楽しい、おもしろいと感じた者が27人いて、何も感じないと回答した者が47人いることは問題である。しかし、今はいじめをすることはないと答えた者が75人（81%）というのが救いである。いじめた経験といじめる人・いじめられる人のどちらに問題があると思うかの質問への回答との間でクロス集計すると、有意差があった（ $\chi^2=19.410$, $p<.01$ ）。いじめた経験のない者は、いじめる側に問題がある（34%）と考えるが、いじめた経験のある者は、いじめる側に問題があるとの回答が少なく（11%）、いじめられる側または両方に問題がある（89%）と考えている。

③ いじめを見た経験の有無

いじめを見たことがないとの回答が40%に対し、60%がいじめを見たかと答えている。いじめの内容は、無視、言葉でのいやがらせ、暴力が主なものである。いじめを見て、かわいそう、止めさせたい（63%）と思っても、多くの場合、何もせず、その場を離れる（75%）だけであり、止めに入ったり、抗議することはごくわずか（8%）である。なお、いじめを見たことがあるという答えと性別の間に有意差があった（ $\chi^2=7.597$, $p<.01$ ）。すなわち、女子生徒の方がいじめを見たことがあるとする答えが多い。女子の方がいじめを意識しやすい傾向があるといえるのではないかと考えられる。

いじめた経験の有無といじめを見たことの有無との間に、有意差があった（ $\chi^2=34.118$, $p<.01$ ）。すなわち、いじめた経験のある中学生は、いじめを見たことがあると答えることが多い。いじめを見たという生徒は、自分との関わりを意識しているので敏感な傾向があり、

いじめを見たことがないという生徒は、いじめた経験がなくいじめに気づきにくい傾向があると考えられる。

④ いじめについての考え方

自分の周りで今もいじめがあると考えている中学生が60%はあり、ほとんどの中学生（71%）は、いじめを悪いことだと考えている。しかし、いじめの問題の所在を、いじめる側にあるとするのは26%であり、いじめられる側および両方という答えは合わせて74%あり、いじめられる方にも問題があると考えている中学生が多い。クロス集計では、性別の間に差が見られた（ $\chi^2=6.552$, $p<.05$ ）。すなわち、いじめられる側に問題があると答えた者と、両方に問題があると答えた者を合わせると、男子は77%で、女子の71%より多かった。

いじめる人・いじめられる人のどちらに問題があるかという質問と、いじめについてどう思うかという質問とのクロスで有意差が見られた（ $\chi^2=15.698$, $p<.01$ ）。すなわち、いじめる人に問題があると考えてる者は、ほとんど（88%）が、いじめは悪いことだと答え、いつでもどこでもあることだと答える者はごく少数（8%）である。両方に問題があると考えてる者は、悪いことだ（70%）としながらも、いつでもどこでもあることだ（25%）が多くなる。いじめられる人に問題があると考えてる者は、悪いことだ（50%）が、いつでもどこでもあることだ（42%）とほぼ同じ程度となっている。

⑤ いじめはなくなるか

今後いじめがなくなると思うかという質問に、67%もの中学生はなくなると考えている。その理由を自由記述で求めた結果は、前述の通りである。なくなると思う者は、26%と少ないが、その理由のなかに、人権意識や相手の気持を考えることなど建設的な意見があることは頼もしく感じられる。しかし、なくなると思わない理由が、人間不信的で悲観的な意見が多いことが気になることである。

（2）実施した中学校へのフィードバック

今回のアンケート結果は、実施に際して協力してもらった中学校の責任管理者にフィードバックした。中学校では、そのデータをもとに筆者も加わって全教員で研修を持ち、調査結果に現れたいじめの問題の実態をふまえて、今後の対策を検討した。いじめられて自殺を考えたことがある中学生の数が多いことにおどろき、スクールカウ

ンセラーと協力して相談しやすい環境整備をする必要性が改めて感じられた。さらに、いじめ問題を根本的に考え、いじめる側の生徒への対応と、いじめのない学校にするために教師はどのようなことに努めるべきかも話し合われた。質問に答えることで、中学生自身がいじめ問題を問い直す機会になればよいという期待をもって実施したが、あらかじめ、いじめの定義を明確にしていなかったことや結果を基に話し合うところまではできなかった。効果を数量的に測定するところまでは至っていない。

高野（1986）のまとめによると、いじめの定義がはっきりしないため、いじめと意地悪の区別がつかなかったり、対応についても意見が分かれることになるとしている。いじめは、相手が分かっている、強者と弱者がはっきりしていることと、暴力犯罪など法に触れるものは除外すべきとしている。したがって、単にいじめに負けない強い意志を持つようにとか、周りが監視していじめられないよう防止対策をするとか、学校内での教育的指導の問題としたり、警察力など外部の協力が欠かせないなどの様々な意見が分かれることになるのである。さらに、いじめられて心理的ダメージを受けている子どもに対しては、臨床心理学的アプローチが効果的であるが、いじめる立場の子どもに同じ手法だけでは、本質的解決にはなりにくいとしている。むしろ教育の問題として取り上げる必要を強調している。

この立場は筆者も同感であり、いじめは、学校教育はもちろん、家庭教育、社会教育の問題であることを認識する必要がある。いじめについての基本的な考え方と対処の仕方を、各個人がきちんと捉え、子どもたちもおとなたちも共に自分自身のこととして考え、お互いの人権を尊重する生き方を貫けるようにする人間教育が大切であることを痛感するものである。

（3）大学生の教育効果

今回、短期大学幼児教育科の学生がアンケートの作成・集計に参加し、教科「総合演習」の研究発表資料として活用した。すなわち、2学年の全学生を対象に研究発表形式で、いじめ問題について討論をした。幼児教育科の学生たちの多くは、卒業後、保育園や幼稚園に就職して、毎日子どもたちと接触する役割を担うのである。したがって、いじめ問題には幼児の段階から対応できる立場にあ

ると考えられる。また、本人たちはやがて結婚して次の世代を育成する年齢にも近いのであり、人生初期からのいじめの予防教育の重要性を考える機会になったと考えられる。

さらに、最近なぜいじめの問題が大きく取り上げられるようになったのか、そして我が国に特有の現象なのかを考察する機会ともなった。

最近のいじめ問題が多発する要因の背景を、河合（1999）は次のように分析している。我が国は第二次大戦後、急速に先進国の仲間入りを果たすため、全体の平均点を上げる教育方針をとり、便利で快適な生活を楽しめる成果を上げることに成功した。しかし、その半面、親や教師は子どもの価値を、一面的な知識の量や学校の成績で測るようになるのである。その結果、子どもたちへの圧力が強くなりすぎるため、いじめや不登校の問題を生むのである。

松尾（2002）は、いじめ防止のプログラム開発の研究の必要性を取り上げている。海外での基礎研究の進歩と防止プログラムが多様な角度から検討されていることを紹介しながら、我が国では系統的なプログラム研究は立ち後れている現状を指摘している。

各個人が、いじめと無縁であるように成長できることが理想であるが、いじめ発生のメカニズムを知って、幼児期を含めた集団現場で心理教育的視点から対応できる人材養成を充実させることも、大切である。

5. お わ り に

今回の調査は、中学生に協力を求めて実施したものであり、アンケート調査の項目を、いじめられた経験、いじめた経験、いじめを見た経験、およびいじめについての考え方で構成した。特定の中学校1校の実施にすぎないが、いじめの実態について現状の一端が判明したといえる。協力者である中学生には、このアンケートに回答することを通して、いじめの被害者の気持を考える機会になるのではないか、そして、人権意識を高めて欲しいという願いを込めたものでもあった。また、実施に協力してもらった教師にフィードバックして、現状認識と対策を考える資料となることを期待した。さらに、短期大学の学生にとっても、調査研究の方法を知り、結果をま

とめながら、いじめ問題の現状と予防的関わりの重要性についても学ぶ機会となったと考えられる。

今後は、さらに調査協力者の対象を広げて年代別の相違点などを明らかにしたいと考えている。

最後になりましたが、アンケートに協力をして頂いた皆様に深く感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 高野清純（編）：いじめのメカニズム，教育出版，1986.
- 2) 詫摩武俊：いじめ，サイエンス社，1995.
- 3) 真仁田昭（編）：いじめ問題にどう取り組むか，文溪堂，1998.
- 4) 河合隼雄：いじめと不登校，潮出版社，1999.
- 5) 松尾直博：学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向，教育心理学研究，2002，50，487－499.